
the way to eat honey ~ 間違った食べ方 ~

藍雨 和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the way to eat honey } 間違った食べ方 }

【Nコード】

N3889P

【作者名】

藍雨 和音

【あらすじ】

大学生の主人公、通称いっちゃんはお隣さんである三歳年下の幼馴染、理奈に言えない過ちがあった。

いつまでもそれを繰り返すいっちゃんとそれを知らずに慕い続ける理奈。

そんな二人の関係は何時まで経っても変わることなく毎日は過ぎていく。

彼氏に振られた理奈はいつものようにお酒に吞まれていた。

そんな理奈を見ていっちゃんはいっちゃんにある決断をする。

そして話はさらに歪んでいく

予告を守らない藍雨 和音が書き上げ切った第三弾。

今回も予告を破ってしまいました…

まあ、そんなことは置いといて

いつものように注意書きといきます

この小説に出てくる仮名であり、また同姓同名の方がいらっしやっ
たとしても関係ないことをここに明記します

またこの小説中には未成年の飲酒シーンがございますが未成年の飲
酒を推進・助長するものではないことをここに明記します

では以上の点を踏まえ、ケータイ・パソコンの電源をおきりになっ
た上で藍雨 和音の今回はあんまり屈曲していない恋愛談をお楽し
みください

1st:daily(前書き)

こちらは先行公開となっております。
十二月十五日から毎日公開になります

「ねえ、いつちゃん。今日の私おかしくないかな？」

頬を赤らめた理奈が何時も通り忙しく、しつこく何度も何度も確認してくる。

「ああ、何時も通りヘンな顔してるぞ、心配するな。」

何時も通りからかうと分かりやすいくらいに怒り始める。

「いつちゃんのバカッ！！幼馴染がこれから告白しに行くっていうのに、そんなこと言うなっ！そんなだからいつちゃんはいつまで経っても彼女が出来ないんだよ。」

適当にあしらっていると段々と理奈の威勢が小さくなっていく。

頃合いを見て、俺は理奈の頭を軽く撫でてやる。

猫のように目を細める理奈が愛おしい。

「心配するな、理奈。お前はお前が思っている以上に可愛いんだから自信を持って告白して来い。大丈夫、お前が告白して断るようなやつは俺がお仕置きしてやるから安心しろ。」

しばらく頭を撫でられていた理奈はようやく元気を充電したらしく、勢いよく頭を上げると満面の笑みでVサインをする。

無邪気な理奈に沸々と歪んだ感情が時を計るように満ち引きが繰り返されていく。

「うん、頑張つて来るね。もし私が振られたらちゃんと慰めてね。」

「そんなこと天地がひっくりかえってもないから安心していいよ。」

俺は笑顔で歩き出す理奈を見ながら、何時の間に固まっていた唾液を呑み込む。

まだだ、まだだ。俺は何度も心の中で熟れていくそれを待つ。

この時間だけはどうしても慣れることがない。

せめて早く時間が流れてほしい。

せめてそうで合って欲しくない。

そう思いながら俺は自分の家に戻った。

夜になり、夕食を終えて読書をしていた俺の元に現れた理奈は笑顔。

そしてその一週間後に収穫の時はやってきた。

2ed:relation

理奈と俺はいわゆる幼馴染という関係だ。

俺が高校一年生で理奈がセーラー服を纏っていた中学一年生の時だった。

俺が小学生までは空き地だった場所に工事が入り出しあつという間に立派な屋敷が建った。

そしてその引越してきた家の一人娘が理奈だった。

大人びた風貌のせいで同級生の男の子に苛められていたのを助けたのが俺である。

止めに入った俺に敵意を見せていた男の子だったが、そこは小学生

の延長でしかなく、そいつ等を追い払うのに高校生という身分はあまりにも効果があり過ぎた。

それ以来理奈と俺の関係は兄と妹、という位置付けになり、夜になつてどちらかが顔を見せても怪訝な顔もされずに通されるところを見ると親公認の兄妹ということだろう。

後日、友達の弟から聞いた話では俺が理奈を助けた翌日に、同級生から俺のことだからかわれたらしいが、本人はまったく気にした様子もなかったらしいので良いでしょう。

そんなわけで俺と理奈は疑似兄妹をしていたわけだが、それは一方的に、知らず知らずのうちに崩されることとなった。

というよりも俺が強引かつ秘匿的に崩した。

理奈が引越してきてから一年足らず経った頃、理奈に彼氏が出来た。

ソイツは俺と同じテニス部で少し面識があった。

俺のイメージは軽い男、というものであり、それは当たっていた。

幼い理奈は付き合っの意味を理解しておらず、恋に恋した理奈はキスを迫られて拒絶したらしい。

そしてその結果、ソイツに振られた。

振られて理奈が取った行動はおおよそ俺の予想を悪い意味でぶっ飛んでいた。

何の予兆もなく俺の部屋に現れた理奈はこの時すでに顔を赤くして、ワインを数本持って押し入ってきた。

意味も理解できずに固まっている俺をよそに理奈は自分の持つてきたワインを次から次へと開けていく。

放っておいた理奈は終いには眠りに着いてしまった。

3 r d : o f f e n c e

そして俺はその時初めての過ちを犯した。

酒を浴びるように飲んでいた理奈は丸まって

寝入ってしまった、理奈に毛布をかけてやろうと思った時、理奈の胸が目に入った。

それまで気にもしなかった理奈が急に色気を帯びたような気がした。

シャツから漏れる鎖骨と放漫な谷間、ミニスカートから伸びる白くて肉付きのいい太股。

それを見た俺は静かに理奈を鑑賞、否視姦していた。

良心の呵責に苛まれ、毛布をかけようと決心した時、理奈が付き合っていたであろう男の名前が口から洩れた。

それを聞いた俺の理性は全て溶解されてしまった。

自分の好きなように理奈の身体を弄んだ。

そして涙を流しながら他の男の名前を呟く理奈を犯した。

躊躇いなんてなかった。

翌日、全く眠れなかった俺は理奈が目覚ますのを忠犬のようにただただ待っていた。

理奈が目覚まして、俺の過ちに気付いたらどうしよう。

それとも恐怖で固まっていただけでその全てを知っていたらどうしよう。

そんな考えが脳を加熱し、俺の頭は爆発寸前だった。

そして理奈が目を覚まし、俺にたった一言こう言った。

『お腹すいた…』

その瞬間俺の荷が軽くなったような気がした。

俺は笑って朝食を作って自分の部屋で食べた。

それからしばらくゲームやランプなどをして様子を見ていたが何もなかったので理奈を家まで送り届けた。

そして俺の止められない過ちは理奈が傷付くたびに積み重なっている。

もし俺の罪を法で計算し、累積すると人生が数回おわるのではないだろうか。

そんなことを思いながらも俺は気付かぬ傷を負った理奈を襲う。

一度覚えてしまった禁断は味を忘れることも、その過ちを清算するにもあまりにも耽美過ぎて、あまりにも甘美過ぎた。

そして今も罪は積み重なり続けて、終わりは見えていない。

4 t h ; s e c r e t s

「全くー。何が『俺が思ってるような娘じゃなかった。』よー。私だってねー、あんたがそんなに女の子の身体ばかり触って来る奴だとは思わなかったわよー。うう、翼のバカやろー！それに付き合って一週間でエッチなことしようとするなバカー。いつちゃんもバカー。地獄に落ちちゃえー。翼もいつちゃんも二人とも地獄に落ちちゃえばいいんだー。」

頬を赤らめた理奈を送り出してから一週間後、バイトを終えて半日ぶりに帰って来た俺の部屋は理奈のせいで惨状と化していた。

月明かりだけが部屋を照らし、無残にも転がるワインボトルとつまみが入っていたであろう袋や器によって床が満たされている。

予想よりも早い登場に驚きはしたが状況を理解するのにさして時間是要さなかった。

理奈の両親は貿易業を営んでおり、その中でも洋酒、特にワインの輸入に力を入れている。

そのせいで理奈は容易にお酒を手に入れることができるのだ。

まあ、悪酔いするタイプでなおかつ酔っていた時の記憶を覚えていないという一番性質の悪い酔っ払いである。

「はいはい、どうせ俺が悪いですよ。その翼くんと地獄に行くからお前は帰れ。」

「いつちゃんのバカー。簡単に死ぬとか言うなー。バカー。いつちゃんなんか死ねー。」

いつもより理不尽になった理奈をあしらっていると心の奥に小さな痛みが湧いて来た。

酔っていない理奈ならデコピンの一つや二つ、当ててから追い返す

が今の理奈を帰すわけにもいかない。

こんな状態で家に帰れと言え、一、二時間後には俺のケータイに迷子届けが届くことはゴールデンウィークに実証されている。

必死に怒気を醸し出そうとする理奈が愛おしい。

差し出してしまった手で肴を摘まみ、理奈が開けた数えるのすら億劫になる缶チューハイを奪ってのどに流し込む。

プンスカ、プンスカ音を立てて怒る理奈を無視して酒を流し込む。

しばらく怒っていた莉乃だが、なぜか機嫌を直して新しい缶チューハイを開ける。

5 t h ; a m e n d

「いっちゃんが私と一緒に酒飲むのって初めてだね。」

理奈がさらに三本缶チューハイを開け、俺がようやく一本缶チューハイを開けた時、それまで一人で騒いでいた理奈が話しかけてきた。

理奈を見れば笑窪が出来ている。

「当たり前だろ。俺が酔っぱらったら、誰がお前を家に帰すんだよ。バカ理奈。」

貶されたにもかかわらず理奈は嬉しそうに、ザルのごとくアルコールをお腹に納める。

「だっていっちゃんって最近私と本音で話してくれること無いんだ

もん。」

「今だって本音で話してるだろ。これ以上何を話せば良いってんだよ。俺は知らん。」

「……………だっていつちゃん。……………私にいつつも何か隠し事してるよね。」

息が止まってしまった。

固まってしまった手は不自然に思われなかっただろうか。

身体は熱いのに頭の中が急速に冷え切っていく。

理奈の視線を鋭く感じたのは気のせいだろうか。

「別に隠し事なんてしてない。それに別に理奈に隠し事したつてとやかく言われる謂れはないだろ。お前だって、俺に隠し事してることの一つや二つあるだろ。同じだよ。」

今日は何もしないで早く家に帰したほうがいい、頭の中でアラームが鳴り響き警告する。

親にバレると面倒だが、ちょっときつめの酒を出したほうがいい、そう判断した俺は立ちあがると隣の部屋にあるブランデーを持ってくるために歩き出そうとした。

「いっちゃん何処行くの。一人で寝ちやいやだよ。ここにいてよ。いっちゃん。」

甘える理奈に『隣から酒を取って来るだけだから』と断り、部屋を出てから一息吐く。

……………引き際、か。

無意識のうちに呟いていた。

これ以上一緒にいると理奈が傷に気付いてしまつかも知れない。

理奈を傷付けている俺が言うのは筋違いだと分かっているけど、理奈にはこれ以上傷付いてほしくない。

そして今一番理奈を不用意に傷つけているのは俺だ。

昔に戻そう。

俺はそう決意した。

6th・irregular

決意を固めようとする自分の手がきつくブレンダーを握りしめていることに気付いた。

廊下に出る前に目を閉じて黙想する。

しっかりと自己暗示をかけてから部屋に入る。

「……………はあ、全く。……………冷や冷やさせるなよ、バカ理奈。……
……………理奈。起きろ、理奈」

部屋には散らかったテーブルの上で静かに寝息を立てて安らかに眠る理奈が居た。

思わず微笑みが零れた。

そして自分に安心する。

大丈夫、まだ、兄妹に戻る。

「バカ理奈。アホ理奈。マヌケ理奈。おい、起きろ。こんなところで寝たら風邪引くぞ。」

テーブル越しに軽くゆすつても寝息を立てるだけで起きそうな気配はない。

テーブルとベッドの間で眠る理奈を抱きかかえるには理奈に近づかなければならない。

不安がないわけではない。

でも今克服しておかないといつまで経っても兄妹になることはできない。

そう自分を叱咤して、テーブルを回り込む。

相変わらず理奈は寝息を立てたままでいる。

出会ったときはショートカットだったのに今では腰にまで伸びた明るく染められた髪。

頭を撫でてみると、長いにもかかわらず心地よい手触りと小さなうめき声が溢れてくる。

乱れた前髪を手櫛で梳いてやると幸せそうに笑みを浮かべる理奈が愛おしい。

前髪をかき分けて白くて可愛いおでこに最後のキスをしてからもう一度身体を小さく揺する。

理奈の胸と太股に触れてしまわないように手を回して理奈をゆっくり持ち上げる。

心地よい理奈の重みが両手に押し掛かり、仄かに理奈の匂いが宙に漂っていく。

腰を上げ、背中を逸らして体重がかかりやすい体制を作る。

すると腕の中で理奈が動いた。

「いっちゃんも翼もバカッ。」

理奈の罵倒と暴動を受けると身体のバランスが崩れてしまった。

足と腰に力を入れるが立て直せそうにない。

せめてと身体を反転させると腕の中にいる理奈もそれに従い倒れていく。

ベッドのスプリングが音を立てて沈んでいき、俺たちの身体を宙にはじき返す。

理奈が俺の上に重なるような体制でベッドに投げ出されていた。

th7: confession

「へへっ。私、初めていつちゃんのマウンドポジションとっちゃったよ、ふふっ。」

呆けている俺を見降ろしながら理奈はとても楽しそうに話している。

ベッドに倒れ落ちてから、迅速な対応をしたのは寝ているはずの理奈だった。

俺の両手を振りほどき、俺の両手、詳しく言うなら両手首を理奈の手で固定し、腰を俺の腹のあたりに落とした理奈は笑顔だった。

そして俺は状況を理解できずにいる。

「どういづつもりだ、理奈。それはいい、とりあえず上からどけ。話はそれからだ。」

声を発してから自分の声がいつもより低いことに気付いた。

でも理奈はそんな俺の様子を気にした風もなく、俺の上で至極楽しそうに笑っている。

「ごめんね、いっちゃん。でもこうしないといっちゃんとお話できないから。」

「今さっきまでずっと話をしていただろ、酔っぱらないでさっさとどけ。いてっ。」

嫌な感じがした。

何かはわからないけど、理奈から嫌な雰囲気がすることだけは分かる。

取り返しのつかないことが起きそうな気がして、理奈をどけようとするも力を入れた両手が痛くなるだけで手は動かず、身体は起き上がることもできずに固まったままだった。

「ごめんね、いっちゃん。この体勢、女の子でも力の強い人を動かせないように出来るんだ。柔道を習ってる友達に教えてもらったんだ。痛くしたくないから大人しくしててね。」

謝るはずの理奈の声は誠意が感じられずその瞳は俺を射抜かんとばかりに鋭く俺を睨む。

状況を理解できないでいる俺に対して攻め立てるような声色で理奈が問うてきた。

「ねえ、いっちゃん。私、いっちゃんが好きな。私と付き合って。」

t h 8 ; r e l u c t a n t

あまりに予想外過ぎて頭が凍りつく。

付き合う？

誰と誰が？

俺と理奈が？

「……………な、に言ってるんだよ、理奈。俺はお前と付き合えない

よ。」

咄嗟に出てきた言葉はあまりにもありきたりで俺たちらしくなさすぎた。

「どうして？ いっちゃん、今は彼女さん居ないよね。だったら別にいいでしょ。」

「理奈、バカなこと言うなよ。俺はお前のこと妹みたいにしか思っていないんだぞ。だから無理に決まってるだろ。だから、俺はお前とは付き合うつもりは少しもないよ。」

「ふ~~~~ん~~~~。いっちゃんって私の事昔から妹にしか思ってなかったんだ~~~~。」

どうして気付けなかったのだろうか。

この時理奈の口調が普段とはかけ離れていることに。

でも理奈からすればこれは確認事項でしかなかったのだろう。

「じゃあ、いっちゃんは何で私にエッチなことしたの？兄妹ならしないよね、そんなこと。それともいっちゃんの中ではエッチがコミュニケーションって言っつもりなのかな。」

「……………え、……………あ……………、何バカなこと言ってんだ、理奈俺がいっつそんなことしたよ。」

この時の俺はとてつもなくマヌケな顔をしていたことだろう。

何時から気付かれてた？

今日？

それともこの前か？

それとも半年前のあの時か？

違う、そんなことはどうでもいい

なんとか押し切れ。

でもどうやって、どうすれば？

「何時そんなことした？そんなの数えたことないよ。」

理奈の答えを聞いて安心した俺はようやく息を再び吸い始めた。

でもそれも気休めだった。

「一月前って言えばいいのかな。それとも半年前？どんなことをされたか言えば認めてくれるかな。それとも私が中学三年生の受験が終わった、初めての時を言えばいいのかな？どれを言えば正解なの、いっちゃん。あつ分かった。今日だって言えばいいんだね。本当は酔わせてからするつもりだった、でしょ。」

頭の中が全てフォーマットされたような気分になった。

もう駄目だ、全部知られてる。

打つ手のなくなり、力なく首肯する俺を理奈は満足そうに見下ろしていた。

t h e l a s t ; u n d o c i l e

「なあ、理奈。お前なんで先週までずっと黙ってたんだよ。すぐに言えばいいのに。」

あの夜から早くも一週間が過ぎていた。

理奈は俺の部屋に来る回数が増え、そしてなぜか俺の膝の上は理奈の特等席となり、今も理奈が一人で独占する状態が続いている。

「え？だってあの時、いつちゃんに言ってたらなんか思いつめて自殺しそうな勢いだったんだもん。だったら間違って、私が告つても絶対にオッケーしてくれないでしょ。」

当然のように答える理奈に当時の心中を当てられた俺は閉口し、そっぽを向く。

「なら時間が経ってある程度罪悪感が麻痺しつつも、それなりの罪悪感が溜まった時に告ったほうがいいと思って。…まあ、気持ちいいっていうのもあったんだけどね。」

「……………はあ。……………お前なあ。いつからそんなに計算高くなっただよ。」

驚き、呆れる俺を楽しそうに見つめてくる理奈は嬉しそうに口を歪めて答えた。

「そんなのいつちゃんを好きになってからに決まってるでしょ。…あっ、いつちゃんほっぺたも耳も真っ赤だよ。可愛いなあ。うりうり、うりうり。」

「うっせ、バカ理奈」

理奈に言われなくてもそんなこと分かってるさ。自分の事なんだから。

「じゃあ俺を好きになったのっていつごろからなんだよ。」

「ん〜とね〜。ヒントー、私が髪を伸ばし始めたところだよ。」

……髪が伸び始めたのは？
あんまり昔から変わってない気がするんだけど？
まあ、いいか

「ねえ、いつちゃん。」

「何だ？」

「ぎゅってして。」

「バカ抜かせ。」

「えへへ、あったかいね。」

理奈が何かを幸せそうに呟いたけど聞こえなかった。

「じゃあ、おバカちゃんないっちゃんに大ヒントね。私のお父さんとお母さんは二人ともお酒がいつちゃんより強くて、そして私は今まで生まれてから一度も酔い潰れたことがありません。さらにいつちゃんのお父さんとお母さんはとてもお酒が弱いです。以上。」

「はあ？ 嘔吐け。今まで何回も酔い潰れただろうが。だから俺が……あつ。」

自分の辿り着いた答えが信じられずに理奈を見るとイタズラに笑っている。

そして有り得ない一つの答えに確信を得る。

その答えに思わず脱力してしまった。

「……………この大ウソツキが。」

「へへっ。愛故に。」

「愛を理由にすれば全部許させると思うな、バカ理奈が。」

「へへっ。」

「……………ねえ、いつちゃん。」

「……………なんだ、バカ理奈。」

理奈が振り向いて、顔を覗き込んできたせいで上目遣いになっている。

「好きだよ。」

「バーカ。……………まあ、俺も、かな。バカ理奈っ」

「へへへっ」

「ねえ、いつちゃん。」

「なんだ、バカ理奈。」

「私、来週は一緒にホテルにゴーだね。」

「ブッ！？……ゴホッ、ゴホッ！！お前はなんてこと言っただ、このバカ理奈！！」

「イタッ！！DV反対ッ！！」

f i n

t h e l a s t ; u n d o c i l e (後書き)

『the way to eat honey』間違った食べ方』
ご愛読ありがとうございました

後書きと裏話、次回予告は次ページをご覧ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3889p/>

the way to eat honey ~間違った食べ方~

2010年12月23日23時10分発行